

2008年 秋学期レポート

第3期生 管野奈津美

2008年12月22日

<はじめに>

今学期は大学院の Deaf Studies/ASL コースに入学し、初めての学期であった。そのコースは ASL teaching, Culture Studies, Deaf History の 3 専攻に分かれており、私は Cultural Studies 専攻だが、1 年目は専攻に関わらず、全員一緒に必修として 4 クラスを履修することになっている。クラスの履修状況は以下の通りである。

Monday	Tuesday	Wednesday	Thursday	Friday
	9:30- 12:20 Deaf Cultural Studies			9:00- 11:50 Sign and The Philosophy of Language
1:00-3:50 ASL Media Production		1:00- 3:50 History of American Deaf Community		

<クラスについて>

1. ASL Media Production (月曜日 1:00-3:50)

ASL (または Sign Language) という対象をどのように撮影・編集するか学ぶクラスである。今はろう者の中でインターネットやビデオチャットによる情報交換や動画を使ったブログが活発で、手話を使ったメディア形態も変わって来ている。それを踏まえてそういう技術を学べるのはとても意義があることであろう。前半は主にろう者によるドキュメンタリーや一般的なドキュメンタリーの理論、そして後半はインタビューの方法、撮影、編集の仕方を学んだ。ろう者は手話を使うので健聴者やろう者とでは画面構成が変わってしまうのでろう者ならでの撮影方法を教わった。そこで4分の短編ドキュメンタリーの最終課題が出て、私はアート学科の教授 Dr. Paul Johnston にインタビューをお願いした。Dr. Paul Johnston は De'VIA (Deaf View/Image Art) を宣言したときの初期メンバーの一人で Deaf Art をテーマに活動してきたアーティストである。De'VIA とは何か、何故 De'VIA に関わったのかについてインタビューした。そのインタビューをもとに彼ら Deaf Artists は何故ろう文化や手話を

テーマにした作品を作り続けるのか？という短編ドキュメンタリーを制作した。編集作業が大変だったが、完成したときは素晴らしい達成感を得ることができ、とても嬉しかった。最後のクラスでクラスメイト全員の作品を鑑賞し、先生から今回学んだことは本当に基礎中の基礎なので後は各自で積極的に学んで今後の仕事に活かしてほしいとメッセージを頂いた。今回学んだ技術は本当にいい経験になったので、これからもっと積極的に技術などを磨いて今後に活かせたらと思っている。他の先生にも見て頂こうということで簡単に上映会を開くことになり、12月のDeaf Studies/ASL Departmentのパーティーで上映された。

2. Deaf Cultural Studies (火曜日9:30-12:20)

ろう文化全般について学ぶクラスである。ろう者とは何者なのか、ろう文化の前に何故、コミュニティが形成されるのか、何故ろう文化というものが形成されるのかということについて議論し合った。クラス担当の教授がノルウェーに住んだ経験が長いということもあって、議論の焦点がアメリカだけではなく、ヨーロッパ、アジア、世界中の各地のろう者のコミュニティやろう文化などにも及び、とても楽しいクラスであった。最終プロジェクトとして今までクラスで学んで来たことを応用し、De'VIAのアーティストの彼らのDeaf experienceとは何か？と分析することにした。

3人あげ、彼らの育った環境、経験が彼らの作品にどのように影響しているかどうか調べた。そしてDe'VIAの作品を分類化してみた。目、耳、唇、脳、腕、手など体の部位にわけ、さらに手話に対する抑圧、ろう文化の象徴（例：ドア）などテーマにわけてそれらをまとめた。前からデフアートについて研究したいと思っていたが、徐々に計画通りに進みつつあり、手応えを感じている。

3. History of American Deaf Community (水曜日 1:00-3:50)

アメリカのろうの歴史を学ぶクラスである。アメリカでろう者はどのように扱われていたのか、ろう者がどのようにコミュニティを形成していったのか詳しく学んだ。前半は開拓当時のろう者の状況、南北戦争や西部開拓に加わったろう者の歴史、後半は手話教育から口話教育に変わって行った経緯から近代までの歴史を学んだ。最終プロジェクトとしてJohn Carlinについて調べた。本来は画家だが幅広い執筆活動をしており、詩から教育に関する評論まで書いた。しかもろう者のための大学

National Mute College（今のGallaudet University）設立を支持し、実現した後、大学から名誉学位を授与されたろう者である。彼はろう教育に関する執筆活動で有名だが、画家として成功した功績はよく知られていない。アメリカのろう者で初めてヨーロッパに留学し、当時写真がまだ普及していなかったため、帰国後肖像画の制作で成功した功績に焦点をあてて書いた。資料を収集し、それを忠実に調べ、論文を書くという作業は自分にとっていい経験になった。最後のクラスでは、先生が自宅にクラスメイト全員を招待して下さり、おいしいサンドイッチ、ワインを頂き、とても素晴らしいひとときであった。先生はアメリカでも少ない、ろう者のろうの歴史研究家の一人であり、プライベートで様々な話を聞くことができ、貴重な機会であった。彼はろう者によるろうの歴史の研究がもっと活発になってほしいとおっしゃっていた。私は日本でろう者の歴史を学んだことがなく、それについても聞いたことがなかったので、今回のクラスで得た経験を日本で活かしたいと思った。今回のクラスで学んだことを通して感じたのはアメリカのろう者の歴史にとってやはり原点はThomas GallaudetとClercであり、Gallaudet Universityの存在が大きいということだろう。



先生の自宅でクラスメイトと撮影

4. Sign and The Philosophy of Language(金曜日 9:00-11:50)

手話が歴史の中でどのように扱われてきたのか、手話とは何なのかを学ぶクラスである。主に音声言語がなぜ優先されて来たのか、手話が劣った言語であるとみなされてきたのか、過去の文献をもとに哲学、言語学、人類学などの視点から分析して

いく。そもそも言語は何のためにあるのか、言語とは何なのか。少し難しいクラスだが手話がどのように扱われてきたか知ることができ、とても有意義なクラスである。古代から圧倒的に音声言語の方が高等な言語、手話が劣っている言語という風に見られて来たが、現代では手話も言語体系を持った言語であるという様々な論文が発表されており、それを中心に議論してきた。最終プレゼンテーションのテーマはSign Communityについてであり、世界中に実在するコミュニティについて調査し、プレゼンするというものであった。私のグループはABSL (Al- Sayyid Bedouin Sign Language) であり、イスラエルの南の砂漠の孤立した村の中に同族結婚を繰り返した結果、ろう者が多く生まれるようになり、村人ほとんどが手話を使えるという。しかし、その手話は外部からの影響を受けておらず、自然に発生した手話と考えられている。アメリカとイスラエルの言語学者がそこを訪れ、自然発生した手話が言語体系を持っているかどうか分析した。手話が自然に発生したことから手話は言語であるという証拠になるだろうと研究が進められている。

<Deaf Studies/ASL Departmentのパーティー>

12日に学内でDeaf Studies/ASL Departmentのパーティーが行われ、学部生、大学院生、教員が集まり、ASL Media Productionのクラスで制作した短編ドキュメンタリーを鑑賞し、ディベートし、最後にはクリスマスプレゼント交換をして楽しんだ。



短編ドキュメンタリーの上映会



同じ1年生のクラスメイトと集まって撮影



最後には皆でクリスマスプレゼント交換！！

<秋学期を通して>

今学期は大学院ということもあって精神的にも体力的にもつらかったが、なんとか全部のクラスの単位を取ることができ、安心している。今学期は本当に毎日ディスカッションばかりで、慣れていない私にとってはストレスであった。大学時代まではほとんど先生の話聞いて質問もないまま終わることが多く、ディスカッションの経験はあまりなかった。こちらではディスカッションが中心で積極的に参加しなければ成績に響くので一種のカルチャーショックを受けた。学期の初め頃はディスカッションのスピードについていこうと思っても ASL が速く、3時間ぶっ通しで手話を読み取るのに精一杯であった。ディスカッションのスピードについていけず、頭がパンクしそうになったが徐々に慣れてつつある。次の春学期でもっと慣れていけたらと思っている。

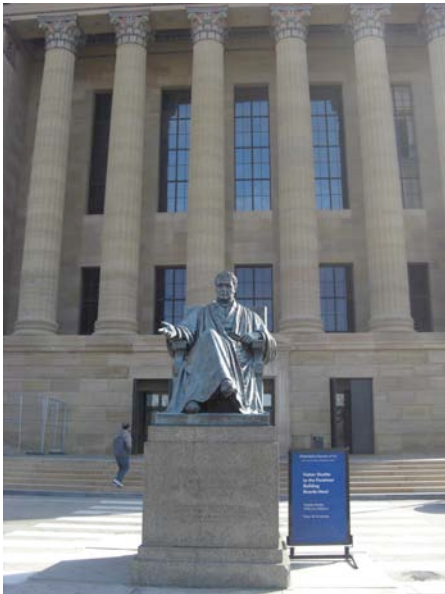
日本の大学や大学院を経験したことがあるが、Gallaudet の大学院は、先生もクラスメイトも驚くほど ASL が流暢で、クラスでは ASL で議論し合う。日本の大学・大学院では情報保障を使っていたが、得られる情報量も限られていた。しかし、ここではハイレベルの議論が ASL で行われ、質問も気軽にでき、コミュニケーションによるバリアもあまりなく、驚くほど勉強に集中できている。こういう経験はなかなかできないことなのでしばらくこの環境を楽しんでいきたいと思っている。

<フィラデルフィア美術館>

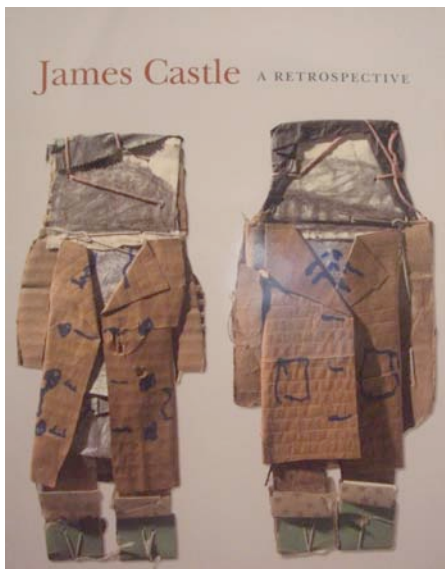
冬休みを利用して日帰りでフィラデルフィアに行って来た。DC とニューヨークの間にあり、車で DC から 3 時間くらいかかった。目的はフィラデルフィア美術館の「James Castle」展である。彼は耳が聞こえず、しかもまともらしい教育を受けてこなかった。幸運なことに経済的に豊かだった家族が一生彼の面倒をみていたため、彼は一日中、牛乳パックの裏やお菓子の箱に絵を描いたりものを作ったりしていたそうだ。新聞や本の字や挿絵に興味を持ち、彼は読むことも理解することもできなかったためか、字をオブジェクトとして扱い、いくつか斬新な芸術を生み出している。ろう者として焦点をあてたというよりも言葉を持たなかった彼が芸術を生み出したという功績に注目している。企画展だけではなく常設展も見たが、フィラデルフィア美術館は世界で有数の規模を誇る美術館といわれ、とにかく広すぎて全部見回するのに時間が足りないほどであった。



美しいフィラデルフィアの都市風景



フィラデルフィア美術館の玄関前



「James Castle」展のカタログ

<メキシコ旅行>

冬休み休暇を利用して12月24日から1月6日までメキシコに旅行に行ってきた。メキシコは現代アートにも影響を与えた、壁画運動で有名なディエゴ・リベラや画家フリーダ・カーロが生まれた国でもあり、前から彼らの作品を見にいきたいと思っていたので念願がかなって本当によかった。メキシコシティでは主にフリー

ダ・カーロの生家を改造した美術館やディエゴ・リベラの壁画の作品が大量に展示されている国立宮殿などを訪れた。



フリーダ・カーロの美術館



ディエゴ・リベラの最高傑作といわれる国立宮殿の壁画



メキシコ独特のカラフルな陶器

年末年始に訪れたグアナファトはヨーロッパ風の建物とメキシカン独特のカラフルな色が組合わさった美しい街であった。



グアナファトの美しい街並み



グアナファトの歴史が描かれた壁画



教会前の広場にて